經濟論叢

第九十三巻　第三號

現代日本の階級構成……大　橋　隆　憲　1

経済学史の現段階……出　口　勇　蔵　19

工場内賃金構造の形成とその論理（一）……菊　池　光　造　38

生産点における
『合同機械工組合』の機能（二）……熊　沢　　誠　52

昭和三十九年三月

京都大學經濟學會

経済学史の現段階

——経済学史研究の現代的意義（二）——

出口勇蔵

五

経済学史の現段階をどうとらえるべきか。端的にいうと、自然主義的な類型はすでになく、歴史主義的の類型もまた余命をとどめず、社会主義の類型は登場してはいるとはいうものの、その構えがまだ不完全な状態のままであり、一方、自然主義の二番せんじがそれとならんで立ちあらわれている、ということができる。念のために、杉本博士の類型を用いていいかえておくと、第二の類型は、それがもつ一面的な解釈のために価値をうしない、第一の類型は事実に目をうばわれて論理を軽んじたために批判の的となって力をうしない、第三の類型もすでに、不完全なすがたで、姿をあらわしていて、第二の類型の二番せんじとならんでいるということができる。だから、経済学史の現段階を論じようとすると、自然主義的な類型の二番せんじを批判するとともに、わたくしが社会主義的な類型と呼ぶものの内容を、それ以前の二つの類型とくらべて展開するとともに、いままでにそれがどの程度には達成され、どの程度には実現されていないかを、語るのでなければならない。[1]

社会主義の類型を自然主義や歴史主義のそれらと比べて説くばあいに、心えるべきことがある。それは、一般的にいって、歴史的発展には連続的な契機と非連続的な契機とが宿るものだということである。発展は変化となってあらわれるが、変化であるかぎりにおいて、発展は以前との非連続を意味する、しかしその同じ発展は以前のものの、ある方向にむかっての展開であり、展開であるかぎりにおいて、発展は以前の状態と連続しているのである。この点に注目していうならば、われわれが経済学史における社会主義の類型と呼ぶべきものの内容を展開するにあたって、われわれは自然主義の類型との連続と非連続と、および歴史主義の類型との連続と非連続とについて、ふかくかえりみなくてはならなくなる。またもし現在、社会主義の類型が不完全にしか成り立っていないとするならば、その不完全な所以がしめされて、同じくわれわれのいう類型との非連続と連続とが語られる必要があるだろう。このような指摘をおこないながら、われわれの立場を以下において説明するであろう。

歴史主義の立場からの経済学史は、自然主義の立場での経済学史を批判することによって、そしてそれよりも自分たちの方が歴史的研究の名に一層ふさわしいと主張しながら、生まれてきた。そのばあい、歴史的研究とは実証性に重点を置いて、また過去との連続性を重視して考えられたのであった。歴史主義のこの主張が全面的に正しかったのではない、だからこそ歴史主義もまた批判にさらされ、自然主義の再登場をゆるしているともみられる学界の情況なのである。けれども、経済学史の立場を論じるにあたって考えるべき問題契機についていうと、歴史主義が自然主義よりもおくれてあらわれた立場であるだけに、歴史主義の方が自然主義よりも、それらを一そう豊富にそなえているといえる。だから、過去の立場との非連続と連続との両面で現段階の経済学史の理念を語ろうとするときには、歴史主義との対決という仕方においておこなうことが至当であるといえる。

歴史主義との対決というばあいに対決の相手方は誰であるか。幸いにして、われわれはその相手方をマックス・ウェーバーの思想の中にもっているのである。杉本氏は第三の型を展開しようとして十分な展開をはたさずして終っているが、それも一つには、ウェーバーの方法論をば経済学史についても適用してみて、理念型的な経済学史像が、ウェーバーにおいては、自然主義と歴史主義とにたいする両面批判であるとともに、また両者の綜合という意味をも、かれなりの形において、もっていたということに、気づかなかったためでもある。

マックス・ウェーバーの方法論を現実に適用して経済学史を編むとすると、どのような成果がみのるだろうか。この問いかけは相当ふかい関心をよびおこすにちがいない。またその方法論の解釈しだいで、期待される成果には大きな幅をもった相違が生まれることであろう。

わたくし自身の解釈にしたがって、ウェーバーの方法論にもとづいて編まれる経済学史を予想すると、大体つぎのことがいえるように思う。まずかれ自身によって語らせようとするならば、『客観性』の論文の中での論述が指摘できる。経済学の基本性格をかたり、当時の方法論上の問題を提示するときに、かれがおこなう簡潔だがいきいきした学史的叙述を、印象ぶかく記憶のなかにとどめている人も多いことであろう。経済学と近代国家権力との宿命的なつながり、技術学的であるとともに実践学的な性格、存在と当為との連関、そして合理的な概念の体系であろうとする欲求、――経済学のこういう基本性格がかたられ、方論論争において反省させられる経済学の立場の分裂がこの性格に由来することがあざやかにしめされている、のがそれである。[3] そしてそれにつづいて、その分裂を統一し問題状況に解決をあたえるものとして、かれ自身の、理念型＝没評価性の理論[4]が提示される。つまりここでは経済学の方法論史の展開の結論として、方法論がかたられているのである。自然主義から歴史主義へとうつりか

わって来て、その綜合が、しかも社会主義と対抗するに足るところの一つの綜合が、可能であるような方法論が提出されているのである。[5]

ウェーバー自身が自分の方法論にしたがって展開している経済学史というようなものは存在しない。それはわれわれがめいめいの解釈にしたがって推察できるだけである。そしてわたくしの推察によると、ウェーバー的な経済学史とは、要点についてしめすとすると、つぎのような類型のものになるだろう。(一)経済学史は各学派を一つの理念型とする、諸理念型の系列となる。理念型の系列の規準は合理的思考の進歩であり、この思考は「計算合理性」と表裏の関係に立つ。（ここにはこの諸理念型をかりにA、B、C、D、などとしておこう）。

(二)それぞれの理念型はまずその論理的な構造が合理性の実現という形で説かれ、その型の基本的な理論的特徴がしめされる。つぎに実証的にこの種の思考の発生と発展が追究されて、もっとも成熟した形のもの――古典学派ならばリカードゥ、オーストリア学派ならばベーム・バウェルクなど――が描かれ、さいごに、成熟したあとで、他の型の要素によって混ぜられながらも、本来の型の思考がどんな風に生き残ってゆくかが、実証的にたどられる。

(三)つぎにあたらしい型の学説がとかれるが、その内容は原則的には(二)においてしめしたのと異ならない。ちがうところはただ、新らしい型の論理的根拠が前の型のそれよりも一そう高度の合理性の中にすえられているということだけである。そして、この合理性をつちかうものが経済的利害関係であるばあいには、論理的根拠を自分の中にそなえているわけであるから、十分な根拠をもつといえるわけであるが、経済以外の人間のいとなみであるばあいには、それが科学的認識であるばあいであろうと、あるいは、それじしん非合理的な由来をもつ行動の合理的原理であるばあいであろうと、そのことは経済学プロパーの問題ではないとされる。――この種の型の系列からなる経済

学史をば、経済理論史あるいは経済学体系史とよんでさしつかえないことは、容易に推察がつくであろう。

しかし、経済学それ自体の歴史が以上で尽きるものではないことは、これまた明らかである。そこで(四)認識における合理性の増大とかさまざまな由来をもつ行動の合理的原理とかをば、経済の合理的認識にかかわらせて説く歴史叙述の部分が、それをおぎなわなくてはならなくなる。この部分は内容的には社会史や社会思想史、および精神史やイデオロギー史になるのであるが、このものの全面的な展開を、ウェーバーは、社会学的な研究のなかで期待していたといってよい。すなわち、国家社会学や知識社会学や宗教社会学の中で、経済学史をおぎなう認識はもとめて得られると、考えていたといえるであろう。

要するに、ウェーバーの方法論を経済学史の研究に適用することによってえられる成果は、経済理論史と各種の社会学の歴史的展開の部分との二種の叙述であろうと、いうことができよう。のみならずここにいう経済理論史の内容について更に検討を加えるならば、つぎのことを指摘することができよう。わたくしは、ウェーバーの考えていた経済理論として、オーストリア学派のそれに近いものであったと主張しているのだが、[6] わたくしのこの主張をここに入れると、ウェーバー風の経済学史の内容となるものは、実は主観価値説をとなえる学説に重点をおいた理論史にほかならないようなものになるであろう、ということがわかってくる。そして経済学史の叙述の内で、経済以外の社会的なおよびイデオロギー的要素について述べられるのを常とするようなものはすべて、各種の社会学——国家社会学・法社会学・知識社会学・宗教社会学など——の歴史的叙述の中に吸収されることになるであろう。それのみではない。経済生活プロパーについても、価格決定をめぐる諸理論のほかは、経済社会学の歴史的叙述にゆだねられることになるであろう。

以上が、ウェーバー風の経済学史の類型として推察されるべき内容である。ウェーバーは方法論争の中に「抽象的・理論的」な立場と「経験的・歴史的」な立場との抽象的対立をみ、これを克服しようとした。[7] しかしかれの提出した理念型＝設評価性の理論にしたがって展開される経済学史が、上に推察したようなものであったとしたならば、われわれはつぎのようにいわなくてはならぬであろう。すなわち、ウェーバーは方法論争における抽象的対立の二つの契機をば、経済理論史と各種の社会学の歴史的叙述の部分として再現し、それぞれに独立の名称をつけたことになるのであって、それらの両契機の統一をはかり、方法論争にたいして終止符を打ったことにはならなかった、と。経済学史のこの状態は歴史主義と一九世紀の後半に復活した、あたらしい自然主義とが同居しているようなものであり、杉本氏の分類でいうなら、第三の型と第二の型とが並置されている状態なのであって、われわれの期待にこたえられるような経済学史では全くないといわねばなるまい。

この状態はもとより、ウェーバーの方法論の批判を通して克服されねばならぬものである。しかしここではその批判をおこなうことが目指されているのでもないから、この型の経済学史において指摘できる欠陥の大きなものを挙げて、それらを乗りこえる道を語り、わたくしが望む経済学史のあり方について論じることにしたいと思う。

マックス・ウェーバーの理念型的な認識においては、対象はつねにまず Gewordensein において把えられる。経済学史の展開の中においても、各学派がまず生成した相においてその論理的構造が語られるのであること、上に指摘した通りである。そしてその立場、たとえばBそれ自身が、それより以前の立場、たとえばAが支配的であるような時代の学界や社会の情勢の中から芽ばえて、AとBとが対立状態におかれ、AとBとの闘争を通して、Aはようやく没落しBはやがて学界にあたらしい地歩を確保し、ついには学界における支配的な地位にまでのし上がる

というような、経済学史上のプロセス――こういうプロセス自体は、理念型にしたがう経済学史においては認識されるには至らないのである。上に語ったように、Aの思考の歴史におけるはじめとおわりとが語られるのと並行して、Bの思考についての同様の考察がつづくのであって、AとBとが同時代に共にあって、互いに経済生活の真実を主張してあい争うという状態――これが経済学史の一般的な事実である――を語りえないとするならば、それは経済学史の対象を、その生成 Werden のすがたにおいて、つまりその歴史的運動の過程において、とらえてはいないといわねばならない。

経済学史が、まえに論じたように、経済学の第二次形成における歴史的反省の産物として、みのるものであるとするならば、そして歴史的反省の本領が過去と現在との対話であって、その対話においてもっとも問題となるのは、過去から現在が生成 werden したということであるとするならば、経済学史上の認識のもっとも基本的なものは経済学の歴史の中にみられる生成ということでなければならないであろう。こういう意味の生成が認識されるというのは、その課題にこたえる論理が研究者に用意されていることによって可能であるが、これについても、わたくしは以前から主張しつづけてきたつもりであるから、ここには詳しくは論じない。ただここで注意しておきたいのは、生成の認識が必要であるということを、現実そのものがわれわれに日々に語りかけているという点である。ここに現実の語りかけというのは、現在、世界には二つの社会体制、すなわち資本主義体制と社会主義体制とが成り立っていて、その間の対立と共存とのかもし出す諸問題が現在の世界の動きを決定しているということ、のみならず、客観的にみて、既成の資本主義体制は防衛の手段をつくしているにもかかわらず、新成の社会主義体制の固成と浸潤のためにようやく後退を余儀なくされつつあるということができる。今や世界は動きつつあり、大規模な体

側転換の時期にあたっているのであり、現在は世界史的な意味をもつ大いなる過渡期なのである。何ひとつ安固なものはなく凡てはうつりかわりつつあるということを、今日ほど深刻に知らされ、実感させられるときはこれまでになかったであろう。この知識と実感とは現在の経済学の研究においても、きわめて大切であり、その第二次形成の一部である、経済学史の現在の類型を考える上にも、ひとしい重要さを以て作用すべきものだといわなくてはならない。こういう作用を自覚しながら経済学史を研究し、その対象における生成を語ろうとするときに、現代的意義をそなえたこの一つの専門学科がなり立つというべきであろう。

では、Werden の過程に重点をおいた経済学史とは、具体的には、どういうものなのであろうか。わたくしはそれは二つの点についてとり上げることができようと思うのである。

一つには、学説ないし思想と現実との間にみられる Werden である。社会の現実がある学説ないし思想を生み、その学説(思想)が実践せられることによって逆に、現実の前進的ないし後退的な形成となってあらわれるものであるが、これまでにも前の段階は、現実の反映とかイデオロギーの発生とかの名において、経済の基礎過程から学説(思想)を追及し、経済史から経済学史への道として研究されていたけれども、後の段階については、あまりふかく探索されなかったといってよかったと思う。政策史的な研究は現実の再形成——前進的であれ後退的であれ——にまで追及の手をゆるめてはならないはずであり、端的にいえば経済学史より経済史への道の研究が以前よりも詳細に行なわれて、実践学としてのこの科学の有効性をないしは無効性を検証することが必要となるだろう。この科学の、実践的な社会運動なり政治なりとのふかいつながりが改めて自覚されねばなるまい[8]。

二つには、学派の交代の時期の研究、あるいは過渡期の経済学説(思想)の総体的把握が要求されるのではない

だろうか。これまでにも、封建社会から近代社会の成立に学界のスポット・ライトがあてられていたのに応じて、絶対主義時代から重商主義に至る時期を一括して、それから古典経済学が成立する過程が多くのひとによって研究されてきた。けれどもそのような研究の共通の特色は、過渡期の学説の総体的把握とはいいがたいという点にあったようである。それは何故か。研究者は、このばあいならば古典経済学に自分の腰をすえて——古典経済学にたいしてそのひとがどんなに批判的態度をとることを知っているにせよ、その態度は内に蔵して表面は古典経済学の成立に全面的に歓迎の態度をしめしながら——Werden の過程をたどろうと意図されたと思う。[9] ところがあたかもこのような態度をとることによって、旧い時代の思想の中にはあって、古典経済学においては見おとされる傾向があったような契機が、学史研究から無視されてしまうという結果をまねき、経済学の発展の中に指摘できるはずの弁証法的構造——あたらしい契機による古い契機の克服とその克服によってもたらされた、同様に重要であった契機の喪失との同時存在——が具体的につかまれなくなるからである。Werden の過程は一方に腰をすえてみることによってではなく、その古いものとあたらしいものとの両方をつつむ展望のきくところに立つことによって、総体的に把握されると思われる。これまでの研究が Werden について行なわれたというのとは少しちがう、このような意味から、学派から学派へのうつり行きの過程が、第二に、あたらしい経済学史研究の重点となるのではあるまいか。なお、くり返していう必要があると思うのは、こういう歴史研究をおこなうにふさわしい論理をば、研究者が身につけておくことが、望ましい、ということである。すべて Werden を認識するためにはつねに、対立しあう二つの契機を同時にとらえ、その両契機のはたらきの中から一つの動きをみちびき出すことができるような思考ができなくてはならないのであって、それなしには上の課題は十分にはたされない。

以上のように、ウェーバーを論評しつつ社会主義的な類型の経済学史の要点を語ってきたが、われわれはここにウェーバーの修正版を提供しようというのではない。かれのブルジョア経済学的な立場を否定することはきわめて重要なのである。ウェーバーの立場とわれわれの立場との間には明瞭な断絶がある、非連続がある。しかしこの断絶や非連続のなかには、前にいったように、連続的な契機がやどっているのであって、以上の論述においては、その連続的な面に重点がおかれて来たことは否定できない。したがって、以上にのべたところから、歴史主義との連続面が強くあらわれていて、その否定的な面が少いという批判がでてくるのも尤もだ、と、思わないわけにはいかない。このような誤解にもとづく批判からわれわれの主張をまもるために、二つのことをかきそえておく。

歴史的相対主義――これは歴史主義の立場から生じる強力な主張である。しかしこの主張のために、歴史学派はてきびしい批判にさらされている。この立場が真理を歴史の流れの中にただよわせておくだけであって、具体的な真理とは何かという発言をおこなうことができなくなるからである。この批判には正しい重要な面がある。だから、われわれの立場はこの批判にたいして応える十分な用意をもっているのでなければならない。われわれの経済学史はどうして歴史的相対主義だという批判にこたえられるのか。

われわれの答はやはり、Werden そのものの認識から求められるほかに途はないだろう。第一に、学説（あるいは思想、以下おなじ）と現実との間にみられる Werden の過程が経済学史において認識されるとすると、その学説が社会に採用されたか、採用されたとして、その創造者の意志どおりに採用されたか、それともそうではなかったのか、あるいはまたその学説は社会から無視されたのであるか、無視されるどころか社会の秩序をみだすものとして遠ざけられ、その創造者は迫害を受けねばならなかったのか、――こういう歴史的事情が明らかにされるにち

がいない。この歴史的事情は、学説の肯定的な、および否定的な意味での実践的な試行の結果にほかならないが、この結果の認識によって、学説の真理性(または虚偽性)の程度が知られることになるであろう。[10] 歴史的な結果による、経済学の価値の認識は、一面では、歴史的事情からはなせないという意味では歴史的、相対的であることをまぬがれることはできないと同時に、その事情の下での経済生活の真理の認識として、相対性を越えた意味をもっている。こういう意味において、経済学の真理は相対的であると同時に絶対的なのである。歴史的相対主義の批判を脱却するみちは、認識を歴史の中から引き抜いて、たとえばウェーバーの試みたように、理念の世界に住まわせることによってではなく、認識を歴史の中に徹底させることによって開けてくるはずである。

しかしながら、歴史的相対主義の批判から一応はまぬがれることができるとしても、社会が階級社会であり、学問が階級闘争の中に呑みこまれているかぎり、階級性という、別の種類の相対主義から、経済学はまぬがれることができないのではあるまいか。

理論の党派性とか階級性とかということが社会思想にたいする決定的な認識であるかのようにいわれてから、すでに久しい。理論のなかに党派的性格だけを認め、それ以上の普遍性を承認しないのは、それ自身相対主義であって、歴史主義の相対主義を批判しているつもりの進歩的立場の人が同じく別の種類の相対主義を主張していながら、相対主義をのりこえているかのように意気さかんなのは、奇妙な事実であった。もし歴史的相対主義を時間的相対主義というとすれば、理論の階級性の主張は空間的相対主義にぞくする。そして、理論の階級性もまた現実に存在することは、疑う余地のない事実である。しかしわれわれの類型の経済学史においては、この空間的相対主義もまた克服されなくてはならぬものである。ではどうして克服されるのか。

階級社会においても、階級的な分裂に照応する真理の分裂状態が終局的な認識であるべきでなくて、普遍人間的なまた普遍社会的な真理を志向する認識への努力はみとめるべきである。階級社会における認識は、もともと、党派性（特殊性）と超党派性（普遍性）との統一という二重の構造をもつ。けれども、この二重の構造のなかで、党派性（特殊性）の契機の方が超党派性（普遍性）の契機よりも強力であり、そこでの認識は、まずは党派的であり、つぎに超党派的であるというべきである。だから厳密にいえば、階級社会であるかぎりは、理論の党派性を完全に克服することはできず、それはいつまでも、真理の普遍性の実現をさまたげようとして、残っているのである。党派性の事実が学問の中で克服されるのは、社会がかわり、階級社会そのものがなくなることによってのみである。

経済学史における党派性についても同じことがいえる。階級社会を対象とするかぎりは、党派性から完全に脱却することはできない。それができるのは、階級社会ではない社会をも対象とするような経済学史であることによってのみである。ことばを換えれば、経済学史が狭義の経済学を対象としているような段階においては、党派性、あるいは空間的相対主義をのり越えることはできないが、広義の経済学をも対象とするに至ってはじめて、党派性をば止揚契機としてうちにもっているような超党派性が実現し、空間的相対主義は克服されるのである。そしてわれわれの主張する経済学史の類型がこのような広義の経済学をも含むものであること、つぎにのべようとする通りである。つまり、歴史的相対主義は理論的にと同じく実践的に乗りこえられる必要があるのであるが、われわれの類型はこの仕事が可能であるような歴史的状況におかれているのである。

最後に相対主義と関連して主張しておきたいことは、われわれの立場にまで到達するためには、ひとはひとたびはみずから相対主義者にならなくてはならない、ということである。相対主義は乗りこえらるべき思想であって、

自分の向う側に置いてそれを眺め、避けてとおったり、批判を加えるのみでみずから快しとしたりするような態度で接すべきではない。そうでなければ、意識するとしないにかかわらず、ふたたび理論の絶対主義に、歴史主義が批判した当のものに、類型でいえば、第一の類型に、堕してゆく自分を見ることになり、学史研究にたずさわる意識の後退のみちをたどることになるであろう。

われわれの類型の経済学史の内容について注目してよい一つの事実を語りたい。それは、上に一言したように、ここではじめて「広義の」経済学がとりあげられるだろうということである。

さて「広義の」および「狭義の」経済学ということばをここで用いるにあたって、それらの意義を明らかにしておくことが必要である。これらのことばは、エンゲルスの『反デューリング論』に出典を求めることが普通であって、「狭義の」経済学については疑問の余地はすくないけれども、「広義の」経済学については少し論じておきたいことがある。「狭義の」経済学とは、生産手段の私有がはじまり、生産と消費との原始的、直接的統一が破れて、分裂し、そのさけ目に流通の過程が介入して以来、階級社会の諸段階を経て、社会体制の全体を統一的に組織する資本主義経済体制が封建体制を破って成立し、発展をとげ、さらにフン熟して、社会に全面的な自己矛盾があらわになり、社会主義的あるいは共同体的経済体制に転化せずしては、その矛盾は解決されえぬことを理論的に証明するにいたるまでの理論であり、歴史であり、またそこで採用された政策をあつかう。しかし、封建体制以前の経済体制については固有の理論は存在しなかったので、狭義の経済学は封建体制の批判からはじまるという風に、さらに限定されている。[11]『資本論』はこの意味での経済学の理論の部分にほかならない。ところが「広義の」経済学については、エンゲルスは二通りの理解をもっていたようであることがわかる。第一は「もっとも広義の」im

weitesten Sinneと書かれているばあいのもので、これは抽象的普遍的な経済法則をあきらかにするものである。[12]第二は具体的普遍的な経済法則とでも呼ぶべきものをあきらかにする経済学であって、ここでは原始共同体から階級社会の展開のさまざまの相を通ってもっとも包括的で単純化された資本主義体制に到達し、この体制が否定せられて、社会主義ないし共産主義の経済体制に発展するとともに、原始共同体を自覚的に再現するまでのプロセスがあきらかにされる。[13]――わたくしがここで用いる「広義の」経済学とはこの第二の、具体的普遍的な経済法則をあつかう経済学のことである。

われわれの経済学史においては経済体制の推移がとりあつかわれる以上、そして現代の大規模な転換もただ当然、歴史的考察の中に組み入れられるべきだと考えられる以上、[14]経済学史の考察の範囲の中に社会主義体制は当然に入ってくるはずであり、かくして、「広義の」経済学が歴史的考察の中でとりあつかわれることになる。これは従来の類型の経済学史においては、当然の結果というかたちでは、生じなかったものではないだろうか。

社会主義的な立場あるいは類型の経済学史のモデルとして『剰余価値学説史』が考えられることが普通であった。というよりは、それが巨人の研究成果のしたたりであっただけに、経済学史家はその権威に圧倒されて、自由な思考をすることをさまたげられた感があった。たしかに、剰余価値の法則という資本主義社会に特有な法則を基準として、過去の経済学説の遍歴をたどるというこの労作は学説史研究として有力なものではあるが、それで以て経済学史の模範的な類型というわけにはいかないと思う。それは『資本論』における理論的研究のみちすがら実のった成果であって、われわれの上記の分類にしたがっていえば、経済学説史のうち、その多様性をしめす研究の一種であって、それで以て経済学史の全貌がしめされているとはいえないと思うのである。

最後に、このような類型の経済学史が編みえたとして、あるいはその一部分でもが認識されたとして、その知識がわれわれにたいして、どんな意味をもちうるかということについて、卑見をのべておこう。

社会科学が実践につながる知識からなることはくりかえすまでもないところだが、知識のこの性格のために、社会科学の知識と人間との間には特色のある関係がうまれる。一方からいうと、社会科学の知識もまた自然科学の知識と同じようにあくまで客観的な実在に関する知識であって、研究者の愛憎好悪の感情から独立したものであり、主観的な要素をそこに介入させれば、認識の価値をそこなうことになるだけである。社会科学の知識は、この意味で、客観的真理をかたる。しかし他方からいうと、客観的な知識がその真理性を実証するのは人間の社会的行動によってためされることによってなのである。客観的な真理もその価値にふさわしい人間によってになわれ、用いられてこそ、その真実性を実現するのであって、そうでないばあいには、価値どおりのはたらきをしめさない。実は、客観的真理の発見それ自身がその発見者たるにふさわしい資格を予想しているのである。この面についていうと、社会科学の知識は主体的真理なのである。だから社会科学の知識は、客観的な真理を語るとともに主体的な真理となる。その真理は二面的であり、この二面を統一するものとしては、真実の名がふさわしいのかもしれない。

社会科学の一分野としての経済学の第二次形成のうちで、歴史的反省を加えて成る経済学史に関する知識の中にも、この真理の二面性はやどる。一面からいうと、経済学史は経済学の歴史的生成を客観的におしえる——このことは、実は、認識する主観がある実践的な態度をとっているということに応じて可能になる——とともに、経済学的な思考が、主観が生きている社会においては、どのような基本的視角をもつことによってその実践的に有効な認識をになうことができるか、そして逆に、どんな基本的な視角をもつときには実践的に価値のある成果をもたらさな

いか、という一つの重要な判断をば、主観にあたえるものなのである。この意味で経済学史の知識もまた客観的であるとともに主体的である。客観的な知識の宝庫であるとともに、実践的な主体性を間接的にやしなうよすがとなる。[15]

(1) 現代のブルジョア経済学の立場から叙述される経済学史を、わたくしは総じて自然主義の二番せんじと名づける。そこにみられる現象は、実践的な社会科学の歴史であることを忘れて経済学史を技術論史にだらくさせ、しかもそれを得意にしているということである。この種の経済学史を批判することもわれわれのひとつの課題であるのだが、本稿には立ちいらない。

(2) 厳密にはこうはいえない。サリーンの立場はウェーバーの考えをいまいちど歴史学派の方向に逆したものということができるからである。しかし、経済学史の諸流派を「型」としてとらえるかれの思考はたしかにウェーバーの立場によりどころを求めているといえよう。

(3) Max Weber, WL. SS. 148 ff., S. 185 ff. 拙訳、世界思想教養全集第一八巻（河出書房新社版）五〇ページ以下、九〇ページ以下。

(4) 理念型＝没評価性という書き方は世におこなわれていない。これは理念型の理論と没評価性の理論とが別個の理論ではなく、相互補完的あるいは相互浸透的であって、認識課題のちがいにもとづいて、ちがった表現をもつという、筆者の持論をば表現しようとして、えらばれた書き方である。まん中に＝のような記号を入れることは、日本語らしく表現したいという、筆者の一般的な願いを、裏ぎっていることを、いいそえておきたい。

(5) マックス・ウェーバーの方法論が、自然主義と歴史主義との対立を統一するとともに、社会主義にたいして科学的な存在理由を主張しうるものでもあることを、目ざして提出されたものであることを確認することは大切である。本稿ではこの点にまで立入って論及するわけにはゆかないけれども、たゞ以下のことだけをしるして、ウェーバーの方法論の方法論史上の一したがって経済学史上の意義をば、読者が理解するための資料としておきたい。

自然主義は普遍性の認識に関心をそそいだ。そこで求められた自然法則は空間・時間の相違を越えてひろく妥当すべきものとされたからである。これに反して歴史主義は個別性にふかい関心をよせるべきことを主張した。経済現象はそれぞれ個性的であるから、その本質はむしろ普遍的な法則からはずれているところにこそ求められるべしと考えられたからである。ところがウェーバーの提出した型の概念は普遍性と個別性との中間的な存在である。時間・空間の相違にかかわりのない一般法則で

はなくて、それよりは特殊化された、ある時代の、ある地域においてきわ立ってあらわれる現象であって、しかも、ある時代の、ある場所の個別的な現象それ自体であるよりは、ある範囲においてはくり返し、同様な特徴をそなえてあらわれる現象——これが型と名づけられるものであるからである。普遍性と個別性との中間 Mitte にあることののゆえに、型は普遍性と個別性との対立を中和するものと考えられたのである。社会主義の立場との関係についてのべると、ウェーバーは、社会主義の主張の中に、一面では自然主義の悪しき復活をみ、他面では歴史主義の悪しき展開をみた。つまり社会の経済的発展は市民社会の世界大の拡大をまねき、その拡大された市民社会に基礎づけられるのが社会主義だとされると解することによって、社会主義は、一面では、自然主義の復活であるのであり、経済生活の範囲が民族のワクを越えて拡がるばあい、そこに権力が、したがって官僚組織が、近代国家におけるよりもさらに大規模にまた強力にあらわれるにちがいなく、それは絶対主義の復活、低級なる歴史主義へとむかう道であると考えたのである。この点においても、ブルジョア経済学を理の理論として見なおすことによって、社会主義からの攻撃にたえられる姿勢をととのえられると、ウェーバーはしたのであった。

重ねていうが、ウェーバーの方法論の方法論史上の、したがって経済学史上の意義を理解することは、大へん重要である。それを理解することによってこそ、かれの方法論を批判することが同時に経済学を一歩前進させることになるということがわかるのである。

(6) 拙稿「マックス・ウェーバーが考えていた経済理論」（経済論叢第七八巻第一号、昭和三十一年一月）一二—二八ページを参照。

(7) Vgl. WL. S. 187. 前掲九三ページ。

(8) この意味から、たとえば、津田内匠氏のテュルゴの研究には、大きな期待がよせられる。

(9) 内田義彦氏の『経済学の生誕』や小林昇氏の『経済学の形成』などはこういう構造をもっている。

(10) この点は、さらに詳しく述べると、次のとおりである。学説（あるいは思想）が現実の形成、発展にどのように寄与したかが問われるのは、それらが肯定的にとり上げられて、試行された次第が、明らかになることによってである。否定的にとりあつかわれたばあいには、現実との実践的な関係は知られるわけがない。だから、学説の真理性や虚偽性が知られるというのは、肯定的にとり上げられて試行された学説だけであるということもできる。つまり、階級闘争の行なわれている社会でなら、支

配階級によって肯定され試行された学説のみが学説の真理性がためされるといえるわけである。反対に、支配階級からは無視され、迫害せられ、被支配階級によってはよろこび迎えられたような思想には、現実的な意味をもった試行はなかったのであるから、その真理性はためされなかったままである。それだけに、被支配階級の思想は、無視、冷遇、迫害の運命にみまわれながら、反面では、バラ色の夢につつまれてきたところがある。そしてそれ以後の時代において、それらは夢の中から取り出されて、さらに現実的な諸条件の下で、いくたびとなく再生するのである。かくして、否定的にとりあつかわれ、試行の状態に浮かび出なかった思想も、歴史とともに、徐々に現実的な試行の過程に入り、その真理性がためされる。最終のためしが実現するのは、階級闘争がなくなったときにおいてである。

(11) F. Engels, *Anti-Dühring*, *Zweiter Abschnitt*, I. (*Marx-Engels Werke*, Bd. 20, 1962, S. 139-40. マル・エン選集、第一四巻下、二八三—四ページ)、この訳文について一言すると、positiv, negativ にたいして「積極的」、「消極的」という訳語がついているけれども、これらは「肯定的」および「否定的」の訳語に代えることがのぞましい。弁証法的な思考が一そうよく表現されるからである。

(12) 「人間社会における物質的生活資料の生産と交換とを支配する諸法則にかんする科学」(*ibid.* S. 136, 同書、二七九ページ)。

(13) 「いろいろの人間社会が、そのもとで生産し、交換をおこない、またそれにしたがってつねに生産物の分配をしてきたところの、もろもろの条件と形態とにかんする科学としての経済学——このような広義の in dieser Ausdehnung 経済学は、しかし、これからつくり出されなければならない。」(*ibid.* S. 139. 同書、二八三ページ)

(14) 資本主義体制がこわれはじめて四十五年を経過していること、社会主義体制がしっかりした軌道にのり出していることを考えるならば、世界史的な意義をもつ経済体制のこの Werden は歴史的考察の中に入れなければならぬ。

(15) 拙論『経済学史』二六—七ページ。諸家の見解にたいする私見はつぎの節にひとまとめにしてのべるけれども、この点についてだけ註記しておきたいことがある。わたくしが学史の知識が体性のカン養にやく立つと書いたこの個所を批評して、横山正彦教授は、わたくしが実存主義的な主張を展開してでもいるように、のべている。(横山正彦「経済学史研究のあり方について」『経済評論』昭和三〇年四月)) たしかに「主体性」は実存主義のお好みの概念ではある。しかし行動、実践にたちむ

かおうとするときは、実存主義者ならずとも、人間は主体となるのであり、その主体となることの諸条件を主体性というのである。横山教授がことばだけによって他人の考えを速断して、そのことばの内容についてふかく考えようとされなかったらしいのは、残念であった。

（第五節のおわり、以下次号）

附言。わたくしは、マックス・ウェーバーの方法論にしたがうばあいに、どんな経済学史がみのるかという問題に、ひとつの解答を出しておいた。しかし具体的な実例でもってそれをしめせという人もあるだろうから、一言しておく。目ざとい読者ならすでに推察されたことだろうが、それに近い例はシュムペーターの学史である。シュムペーターがウェーバーの考えにもとづいて経済学史を編んだとは必ずしもいえないけれども、G. d. S. をとりまく経済学者のあいだには、共通の経済学的立場があったのだ。